

第3回ESDティーチャー・フォローアップ研修会 概要報告

大西 浩明

- ◇日時 2026年9月29日(火) 19時～20時30分
◇方法 Zoomによるオンライン方式
◇参加者 26名

- ◇実践報告 滋賀県草津市立玉川こども園 中川珠紀先生
「世界に一つだけのTシャツをつくろう」

【実践概要】

5歳児の取組 草花などの自然物を使って色水づくりが好き
保育者から教えるのではなく、子ども自身の気づきを大切にしたいと考えている
玉川学区は萩が昔から有名 あらゆるところに萩が植えられている
身近な萩を染料として使ってオリジナルのTシャツをつくる
5年前から毎年やっている 作ったTシャツを学校行事の際はみんなを着る
萩の刈取り、粉碎など、工程をすべて一から体験させる
アイデアや工夫を生かし、地域の専門家の手を借りながら染め方やデザインを工夫する



萩の刈取り



煮ながら染めていく



水で洗う

保護者とともに活動する（他府県からの転入が多いので地域を知ってもらうきっかけに）
どんな模様に仕上がるかは、出来上がってみないと分からない
今年は藍もワンポイントで入れてみた



ESD との関連

多様性：一人として同じものができない
相互性：地域の人に支えられている 地域の人も子どもたちと関わる喜びを感じる
連携性：「地域資源は共有し、守り、活かすもの」という意識の育み

世代内の公正 自然環境・生態系保全の重視

煮だした萩や染料は園内の畑の肥料に 循環させるシステム

「萩まつり」という地域のお祭りの実行委員の方たちに T シャツをプレゼント

祭り当日には全員が着てくださった 一体感が生まれる

成果と課題

○身近な自然の恵みに気づき植物を大切にする思いや、素材が変化していく面白さの発見があった

○保護者とともに活動することで、家庭にも地域のよさを再発見してもらえた

○保育者が地域資源を保育に取り入れることの意義を実感し、自然や文化を教材とする視点が広がった

○ESD は特別な活動ではないということに気づくことができた 日常の保育そのものが ESD

●日常の遊びや学びにどうつなげていくか 持続可能な体制づくり

【質疑応答、意見交流】

・セイタカアワダチソウで染物をしたことがある。色の定着のために焙煎が必要かと思うが？

→ 使っている鍋がアルミなので、特に他に焙煎液につける必要がないように聞いている。

草木染めをするときに、金属イオンと結びついて色が定着する。

金属の種類によって色が変わったりするのでおもしろい体験もできる。

・草津市は京阪神に通勤・通学できる利便性のある地域。利便性だけを求めて来られた人にとって、地域のよさを体感してもらえる取組だと思う。

・園が地域のよさを発信しているというところに意義がある。この取組が恒例になっているメリット、デメリットを教えてほしい。

→ 5 歳になったら萩染めをするという楽しみが子どもにも保護者にもあるのがメリット。

地域にも萩染めのよさが浸透しつつある。

取組そのものが形骸化しないようにと思っているが、パターン化している部分もあるかも。

子どもにチャレンジしたいことを選ばせる部分があってもいいのでは。

職員がどんどん入れ替わっている中で、ESD は特別なことをするものではないことを若い先生にもよく話している。なぜその活動をするのか、取組の核の部分を中心に伝えていきたい。

ユネスコスクールになったことをきっかけに、ESD を前面に出して保育するようになった。

子どもの姿を通して、ESD の意義について保護者や地域に伝えるように心がけている。

・E（えっ？）S（それって）D（どうなん？）という、子どもの思いや気づきを大切にするのが ESD と教えてもらった。

・保育者としてはつい答えを出してしまいがちだが、子ども自身が自ら試行錯誤しながら解決に迫ろうとするところを大切にしたい。

・高校の立場から、どうしても「どう指導するか？」を考えてしまう。高校でも、時間がかかっても自分で答えを見つけていくことを大事にしたいと感じた。

・材料を一から子どもたちと揃えていくからこそ、子どもたちの意欲が大きいのだと思う。

玉川こども園では、粘土遊びの粘土を自分でつくるところからされているのを知って驚いた。

用意されたもので遊ぶ今の子どもたちの遊び方が違う。

・指導者が教えたり強く注意したりしなくても、子どもが動けるようになっているのは、ESD の理念のもとに日常的に園を挙げて取り組んでおられるからだと思う。